

38 歳が思う公衆衛生獣医師の役割とは？

瀬戸順次[†]（山形県衛生研究所微生物部専門研究員）

私は、2000年に大学を卒業後、大学院に進むか社会に出るか迷いながら、早めに社会に出ておいたほうが良いと考え、小動物臨床の現場に就職した。その後、2001年に縁あって山形県に奉職し、最初の勤務先はBSE問題真っ只中の食肉衛生検査所だった。当時の私は新米だったので、与えられた仕事を愚直に成し遂げる日々だったが、過熱するマスコミ報道や職場への取材陣の殺到で、普段は温厚な上司や先輩がこの時ばかりは殺伐とした雰囲気だったのを覚えている。次いで、2006年に配属された保健所では食品衛生と動物愛護に関する業務に従事した。大規模製造施設の社長から居酒屋の店主まで、ペットショップのオーナーから犬猫に関する苦情の申し立て者まで、様々な人々と接する中で交渉力が格段に磨かれたと感じている。そのような業務につきながら、2007年に近隣の医学部大学院に入学した。昼は仕事、夜は大学という過酷な毎日だったが、今思い返すととても充実した日々だったように思う。そして、2008年からは現在の衛生研究所に所属している。

衛生研究所では微生物部の一員として、感染症法に基づく細菌全般に関する業務をおこなっている。御多分に洩れず、微生物部にもルーチン業務が多数ある。しかし、ルーチン業務で扱うものが県民の流行状況を反映した病原体、保健所で収集した感染症に関する検体、そして直近の食中毒事件の病原体など、つまり『新鮮な材料の宝庫』であるため、機を捉えて学会発表や論文投稿をすることが自然な流れになっている。論文では、食中毒事件の起原菌だったソネネ赤痢菌の薬剤耐性に関する研究（感染症誌、2012、86、608-609）、結核菌の遺伝子タイピングによる結核患者の感染源・感染経路特定に向けた取り組み（結核、2013、88、535-542）、結核菌の血液検査の有用性に関する検討（結核、印刷中）などを書いてきた。中でも、こちらも縁あって大学時代の恩師と再会し共同でおこなった「つつが虫病」に関する研究で、これまで不明だったつつが虫病血清型（Shimokoshi型）の媒介ツツガムシ種を発見した瞬間の立てなくなるほどの震えと感動は今でも鮮明に覚えている（Microbiol Immunol, 2013, 57, 111-117）。

最近、One Healthの理念というものを知った。人、動物、環境の健康維持には3者のいずれの健康も欠かすことができないという視点に立ち、それぞれの健康を担う関係者が緊密に協力して3者の健康を維持・推進していくこうとする考えである。この理念からすると、衛生研究所は「人」の健康維持を担う機関ということになる。しかし、私が獣医師である以上、人と動物の関係、具体的には人獣共通感染症についても考慮していかなければならないと常々思っていた。そのような中で、2012年に山形県獣医師会の全面的な協力の下、県内の小動物臨床の先生方と飼い猫のジフテリア毒素原性 *Corynebacterium ulcerans*（人獣共通感染症病原体）に関する研究（日獣会誌、印刷中）を実施した。当時は、只々一心不乱に研究をおこなっていたが、今思うとこの取り組みはOne Healthの理念に沿ったものだったのかもしれない。

公衆衛生を担う地方公務員獣医師として12年の歳月が経過した。特に最近、公衆衛生獣医師の役割とは一体なんだろうと思うことがある。それは、現在の所属の英名が Yamagata Prefectural Institute of “Public Health” と「公衆衛生」を冠する職場だからかもしれない。私が大学卒業後はじめに就職した小動物臨床の現場は、言ってみれば「個」を相手にする仕事であった。そして、「個」を相手にするからこそ飼い主に感謝される機会も多く、感謝されることが仕事をする上での原動力の一つになっていた。一方、公衆衛生獣医師の業務で

瀬戸 順次

— 略 歴 —

- 2000年 北海道大学獣医学部卒業
- 同年 澤嶋動物病院（神戸市）
- 2001年 山形県内陸食肉衛生検査所
- 2006年 山形県村山保健所
- 2008年 山形県衛生研究所
- 2011年 医学博士取得
- 現在に至る



[†] 連絡責任者：瀬戸順次（山形県衛生研究所微生物員）

〒990-0031 山形市十日町1-6-6 ☎023-627-1373 FAX 023-641-7486

E-mail : setoj@pref.yamagata.jp

は、個人に感謝される場面は少ない（むしろ煙たがられることのほうが多いかもしれない）。それは、公衆衛生が「個」ではなく「社会」の健康を対象としているため当然と言えば当然である。では、社会の健康を相手にする公衆衛生獣医師の役割とはなんだろうか？ その問いに対する38歳獣医師の現時点での答えは、①どのような職場に配属されたとしても、社会の健康を維持するという役割をひたむきに遂行すること、②それぞれの業務の中で湧き上がった疑問に対して獣医学的知識を駆使し

て解決し、得られた知見を学会や論文の場で広く世間に公表すること、③①の経験の蓄積及び②の知見の公表を繰り返すことにより、社会の健康を推進するための情報を提供し続け、最終的に社会を変えていくことである。現状では、私は研究によって得られた若干の知見に興奮している程度であるが、今後、仮に社会を変えるような仕事ができる時、これまで感じたことのない喜びを得ることができるのではないかと期待している。